



青窓紀聞

文化年續記

十一甲戌ヨリ  
十四丁丑ニ至ル

二  
第一

庚子 戌宿 張月 卜ヨリ

二九一三五  
三三  
1104  
三

2778

33  
3  
青窓紀聞  
二冊

33-3 青窓紀聞 卷2

文藝叢刊 花亭上人 和名 西川 回音

全十二卷 尾形重定 和名 西川 回音

方外五言 和名 西川 回音

今十二卷 和名 西川 回音

和名 西川 回音

水野正信著



郁才園隨筆 卷之三

○ 神皇正統記 卷之三

和名 西川 回音

花中納言定家

○ 又 和名 西川 回音

鐘意

○ 其の夜乃 和名 西川 回音

春轉

あ 浅くおちきり縁なまの何さひを御さすきい乃えし  
 海 まつりあふふら東の西にまをまつる一七夕乃りし  
 の ころあけつるうけの暮と七夕乃ちきりし後のお逢を  
 か あいふりおのづかの七夕乃神とありてその川は  
 七 海つるまあせりてその川はつるもの星なると  
 ○文化十甲戌正月廿八日四時於か多野部草原場  
 如國古角也令其下守汁一様之が下能有るまるき  
 常列ま住しをさすちき親に入ちけり有らむ



○文化十一年東樞心本堂くらづも

○文化十一年戊三月五日頃のりてんせ物よりある事なれば  
 瑞けあき登り御人より代海地川乃字取之手甲撫川  
 志多那ふ多打百燈祭不様入中よりあてつをゆへ  
 水くまふはすねるまはふ年小まの事ありてまら  
 ち後ふはすを帝古元の月利りゆへこれつりの名春  
 色くまふはすねるまはふ年小まの事ありてまら  
 ち後ふはすを帝古元の月利りゆへこれつりの名春  
 色くまふはすねるまはふ年小まの事ありてまら  
 ち後ふはすを帝古元の月利りゆへこれつりの名春



かゝりぬれぬすも中り水きくは  
 一向水清りあまふはふ年小まの事ありてまら  
 ち後ふはすを帝古元の月利りゆへこれつりの名春  
 色くまふはすねるまはふ年小まの事ありてまら  
 ち後ふはすを帝古元の月利りゆへこれつりの名春  
 色くまふはすねるまはふ年小まの事ありてまら  
 ち後ふはすを帝古元の月利りゆへこれつりの名春

蓋鳴りんとふとむる邊陽さる

名をのりしりし者女利とていふもむすのあま方りて時命の御子孫  
 中にもわらわのうらまへとていふもむすのあま方りて時命の御子孫  
 右を御座るに同く南基の御子孫とていふもむすのあま方りて時命の御子孫  
 上御座るに同く南基の御子孫とていふもむすのあま方りて時命の御子孫  
 御座るに同く南基の御子孫とていふもむすのあま方りて時命の御子孫  
 御座るに同く南基の御子孫とていふもむすのあま方りて時命の御子孫

○因列島取城主松平因幡守殿

因列島列島國之五十五石 領之島守之者 本姓他田氏 神卷之内後アリ

文化十一年六月十五日白藤殿上より因分松平村百姓也  
 仙石五郎 百人妻 宇元 百七十九石  
 佐左衛門 百三十三石 同人妻 一石 百三十一石  
 留之助 百三十三石 同人妻 一石 百三十一石  
 三十郎 六十石 同人妻 一石 五十四石  
 源之助 三十七石 同人妻 一石 三十五石  
 右源之助 将之四女女子六人子五人有之りて一帯代之長存也  
 左源之助 一石 一の行を入ナリ

○文化十一年

えうけりしりし者女利とていふもむすのあま方りて時命の御子孫  
 志の御座るに同く南基の御子孫とていふもむすのあま方りて時命の御子孫  
 大まきいしりしりし者女利とていふもむすのあま方りて時命の御子孫  
 芽出とていふもむすのあま方りて時命の御子孫  
 右源之助 将之四女女子六人子五人有之りて一帯代之長存也  
 左源之助 一石 一の行を入ナリ

竹腰 成瀬 志水甲列 石河 瀬川 五三 欽嘉 成豊 大造 中條 山半 山院

古風かたのてりもさへしあまの茶湯の茶碗と  
とよきみのまゝにやうあまのいほも信と

言橋 中西

りくくもあま直取きて桂木洋判 四目くけし  
尾はを玉八

名おめて人の養れと茶子のむ  
梅は梅の花の情何れ梅のむ  
老ありも枝をりして松のむ  
咲はあぬ花の咲き草細  
大やうに咲や深山の木のむ  
まよつてくまのむあまのむ  
古りねもあまのむあまのむ  
いふ程の花もあまのむあまのむ  
咲らあまのむあまのむあまのむ  
いふ程の花もあまのむあまのむ

竹勝 志水 渡色 石河 滝川 五重 沼木 如豊 大造寺

流さきて風ささるの影はか  
夜ありのなきさよむ紅あ  
花の香のほけははせし  
はくあまのむあまのむあまのむ  
そあまのむあまのむあまのむ  
柱くくくくくくくくくくくく  
信の子もあまのむあまのむ  
古の地のあまのむあまのむ  
あまのむあまのむあまのむ  
卯の花のあまのむあまのむ  
人あまのむあまのむあまのむ  
枝ありもあまのむあまのむ  
あまのむあまのむあまのむ  
あまのむあまのむあまのむ  
あまのむあまのむあまのむ

中條 成半 空村 山陀 三橋 林 鏡島 横孫 横三 三木 七登 龍權 付田 小池 若川

面白くあるものなり花白  
 雪おりの白きけいなるま柳  
 我まよひ咲くはえよ遊様  
 いらぬやうもやあまき鬼芍  
 葉もふりくまぬきさく  
 植うつぬ肉ふおそり今年竹  
 又してもしつゝことりや杜  
 その柳もあまなる出まきし  
 五葉もくもかして咲きさく  
 水仙花の田

お珠  
 石堂  
 水後  
 大珠  
 士居  
 紀田  
 月ヶ原  
 田宮  
 〇紀州目上郡志加ふる海根村の善哉や父八因伏三まきし  
 農妻より宝曆八寅年出生し一に歳の時存生の候を存せ  
 九才の時出家せし事と又母少乳ふま  
 十八才の時増きし一に夜石佛を佛し十七歳の時出家と  
 乳おけ世父母欠し出家し別日有郡從生寺淨士

徳西酒住持大徳少僧の刺髪海衣別住布と稱を誓して  
 峨と日都をの川村の山也あま房と稱ひ多佛経 するも  
 まの因那親繁村の苗を房とむむばい多佛経をきき三年  
 小まふ法士那持法村の房と稱ひ切をきむる二も又まふ法  
 山郡上層あまきまら天牛の面陰を志つゝい別  
 するも一子日住後持別夜住吉山上お別り三年日都  
 播尾山お別りするも二と二と三と三と三と三と三と三と三と  
 京都の住持まき日光山持家の志し一に法衣をきつゝ白  
 右の寂音和四子年改元とありし其の寺移るれ松平右衛門  
 傳海院及僧存お出り事  
 文化十一年庚子月十一日十七年目二江戸傳海院一と名則  
 徳本如方の物号

徳本如方物号  
 徳本如方物号  
 徳本如方物号  
 徳本如方物号

汝遠人外の生を語ありて苦しむる況み身をあらむなり

瀬川谷

釋尊の佛経を讀む法を弘の今時の僧ハ釈迦をあらむ  
夏後會をまつりてあり又この身をあらむ如恨を和良

和尚又曰

浪水よりぬく舟うつねれ水よりあらむは月よりあらむ

瀬川返云

谷水よりぬく舟よりあらむは月よりあらむ

徳又

吉原ありて先の河はあらむとてあらむは月よりあらむ

和尚

汝禿の言記あり今の身はあらむとてあらむは月よりあらむ

禿

瀬川谷

禿よりうらむの言記あり今もあらむは月よりあらむ

徳

汝多くの客ありてうらむは月よりあらむ

瀬

念よれい何う家の言記ありてあらむは月よりあらむ

徳

汝客人をあらむは月よりあらむ

瀬

空まゝぬ人の心を村老にあらむは月よりあらむ

徳

汝道中おそくあらむは月よりあらむ

瀬

ふのハありやあらむは月よりあらむ

徳

汝多くの客ありて言記をあらむは月よりあらむ

瀬







一十五 朔日 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸

未刻 非内之皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸  
御幸及接収 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸  
接収之長 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸  
御幸及接収 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸

一日 申刻 入堂 法華 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸

一十六 朔日 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸

一十七 朔日 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸

一十八 朔日 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸

一十九 朔日 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸

二十 朔日 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸 皇太子御幸

之方、少者西向、此書付長十、  
不、  
列后、  
返家、

二十、 御名代

衣冠付長、

西返家、  
神、  
西人、

史、  
友、  
十、

神志

竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿

竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿

竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿

竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿

竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿

竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿

竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿

竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿

竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿

竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿

竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿

竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿

竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿  
竹腰山殿

東照宮御書

御書  
御書  
御書  
御書

御書

御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書

以清安事の由是 之清安の川舟之舟修之由是  
中地高き之 漸新なる

即前古事名 此の事 寺法より及了之

即年易礼 行禮 此古事修之由是

即年易礼 此の事 即年易礼 此の事 即年易礼 此の事

一説は即前事より退夜

即前事修之由是

即前事修之由是 山此の事

即前事修之由是

即前事修之由是 山此の事

即前事修之由是 山此の事

即前事修之由是 山此の事

即前事修之由是 山此の事

即前事修之由是

一 即前事修之由是

即前事修之由是

即前事修之由是 即前事修之由是

山代世之給人等殿二番古越方山忠年

法前古山代之<sup>之</sup>信<sup>信</sup>寺行寺次<sup>寺</sup>由道

り市年等礼<sup>礼</sup>由道法女<sup>女</sup>出<sup>出</sup>列

寺行寺次<sup>寺</sup>由道法女<sup>女</sup>出<sup>出</sup>列

寺行寺次<sup>寺</sup>由道法女<sup>女</sup>出<sup>出</sup>列

業肉<sup>業</sup>上<sup>上</sup>道<sup>道</sup>山代世<sup>世</sup>此<sup>此</sup>市<sup>市</sup>寺<sup>寺</sup>行<sup>行</sup>寺<sup>寺</sup>次<sup>次</sup>

列<sup>列</sup>由<sup>由</sup>神<sup>神</sup>与<sup>与</sup>道<sup>道</sup>送<sup>送</sup>上<sup>上</sup>古<sup>古</sup>幣<sup>幣</sup>行<sup>行</sup>神<sup>神</sup>油<sup>油</sup>藏<sup>藏</sup>

山代寺行  
山代寺行  
山代寺行

市<sup>市</sup>行<sup>行</sup>寺<sup>寺</sup>次<sup>次</sup>由<sup>由</sup>神<sup>神</sup>与<sup>与</sup>道<sup>道</sup>送<sup>送</sup>上<sup>上</sup>古<sup>古</sup>幣<sup>幣</sup>行<sup>行</sup>神<sup>神</sup>油<sup>油</sup>藏<sup>藏</sup>

法集八講

一 一 一 一

右講式<sup>式</sup>平<sup>平</sup>与<sup>与</sup>神<sup>神</sup>与<sup>与</sup>幣<sup>幣</sup>行<sup>行</sup>神<sup>神</sup>油<sup>油</sup>藏<sup>藏</sup>

門<sup>門</sup>次<sup>次</sup>十<sup>十</sup>社<sup>社</sup>中<sup>中</sup>半<sup>半</sup>お<sup>お</sup>道<sup>道</sup>極<sup>極</sup>相<sup>相</sup>礼<sup>礼</sup>此<sup>此</sup>市<sup>市</sup>行<sup>行</sup>神<sup>神</sup>油<sup>油</sup>藏<sup>藏</sup>

寺<sup>寺</sup>行<sup>行</sup>寺<sup>寺</sup>次<sup>次</sup>由<sup>由</sup>神<sup>神</sup>与<sup>与</sup>道<sup>道</sup>送<sup>送</sup>上<sup>上</sup>古<sup>古</sup>幣<sup>幣</sup>行<sup>行</sup>神<sup>神</sup>油<sup>油</sup>藏<sup>藏</sup>

寺<sup>寺</sup>行<sup>行</sup>寺<sup>寺</sup>次<sup>次</sup>由<sup>由</sup>神<sup>神</sup>与<sup>与</sup>道<sup>道</sup>送<sup>送</sup>上<sup>上</sup>古<sup>古</sup>幣<sup>幣</sup>行<sup>行</sup>神<sup>神</sup>油<sup>油</sup>藏<sup>藏</sup>

寺行寺次  
寺人長

了之  
了之  
了之

右甲衣溝武比後清下寺住持の書

乙卯年寅元と申道法可日也

丙申年寅元と申道法可日也

丁酉年寅元と申道法可日也

寺住持の書  
引神と成所

下

元清中会

一 何下寺の住持より後清下寺住持の書

元清中会の御座り集給人余宗徳

乙卯年寅元と申道法可日也

丙申年寅元と申道法可日也

丁酉年寅元と申道法可日也

戊戌年寅元と申道法可日也

己亥年寅元と申道法可日也

庚子年寅元と申道法可日也

辛丑年寅元と申道法可日也

壬寅年寅元と申道法可日也

癸卯年寅元と申道法可日也



一 舞末高年別始



右其内附の正四の... 舞末高年別始  
此之秋一院退丸 寺持力主人云云 舞神 舞神と云  
返去、右内附下

一 河... 舞末高年別始  
右内附人替衣者... 舞神... 舞末高年別始

二番古教之名... 舞末高年別始  
右内附... 舞神... 舞末高年別始

右内附

舞末高年別始

右内附... 舞末高年別始

夕合之四年言之 致之教之院  
 道元

七十一  
 八十九  
 九十九

六十九

七十九

八十九

右八十九陸式す此法法と法す

吾道之四年言之 致之教之院  
 道元  
 陸式す此法法と法す  
 道元  
 吾道之四年言之 致之教之院  
 道元  
 陸式す此法法と法す  
 道元  
 吾道之四年言之 致之教之院  
 道元

*Handwritten marginal notes on the right edge of the right page.*

巳上列 以清寺社 吟原 以 志

吟古 後 志 清 寺 社 智 臣 志 殿 下

集 上 禮 儀 一 番 志 殿 志 臣 志 殿 下

志 清 寺 社 志 臣 志 殿 下 志 臣 志 殿 下

志 臣 志 殿 下 志 臣 志 殿 下 志 臣 志 殿 下

神 志 臣 志 殿 下

# 江 美 園 記

七 中 切 記

*Red and black handwritten notes below the title.*

*Handwritten notes in the left margin of the right page.*

右 法 武 志 臣 志 殿 下 志 臣 志 殿 下

志 臣 志 殿 下 志 臣 志 殿 下 志 臣 志 殿 下

志 臣 志 殿 下 志 臣 志 殿 下 志 臣 志 殿 下

志 臣 志 殿 下 志 臣 志 殿 下 志 臣 志 殿 下

志 臣 志 殿 下 志 臣 志 殿 下 志 臣 志 殿 下

志 臣 志 殿 下

一 介 上 切 志 臣 志 殿 下

志 臣 志 殿 下 志 臣 志 殿 下 志 臣 志 殿 下

客知度下、是之噴煙一番を教  
いふことと社より 庭階上人の殿方不測、  
ましくも名 子心二番を教ふ不為神と云  
いふことと社より 行現進多敷い即以信を分曉  
いふことと社より 今乃台い事

所名代三郎殿方社奉行  
古文 書内中是屋敷に在り  
古文 子心二番を教ふ不為神と云  
古文 行現進多敷い即以信を分曉  
古文 今乃台い事

おまはり少年を法所、心者も別  
古文 所名代い事  
古文 神と云送送中上は昇殿こと  
古文 沙海お経をいふ  
古文 坊心未進屋敷い方中院者い  
古文 子心二番い  
古文 所名代い事

多し好信  
 伊神もまき海 伊名代も島殿  
 寺智神内山行載お珠も山道も高  
 神も并河原と道も 之は信  
 一と社有り ありは伊年高  
 波も秋一挽返丸 と社有り 長久保  
川押と居る  
 名信修人 退下  
 一丁乙と一丁方月好也

伊名代も恒例  
 神也山内も伊名代  
 神也を河之原も高好信也  
 七社も信也 ありは伊名代  
 有名も伊名代下 集りて伊名代  
 一丁乙と一丁方月好也  
 伊名代二番七社も 伊名代也  
 七社有り 伊名代 伊名代也

何理と名取

百光有法

川道

右法武平養樂別高林と兼修作也

退云莊表下村と社字切退光と社字切

宿居引井と宿居給人並下

宿居

一軒別は宿台と社以律修と並修

大境之宿居給人替教客殿廊下

集り之喚浄一書吉報は所と社字切

給人兼殿二書吉報と中法下

初年之... 及... 法... 列... 義

胎曼陀羅供 啓別始

右法武始... 法... 一... 法...

業内... 法... 法... 法...

別高入

御内... 法... 法... 法...

法... 法... 法...

申遊 所名代付集人法字 奏未列南

神皇御道途上之車帶神皇御道 此石為義也

還本川次所餘也 常月別而結之并

修紀述所油取西側之島同之

之及所各社 此年今 此年今

今秋了一 此年今 此年今

此年今 此年今 此年今

此年今 此年今 此年今

此年今 此年今 此年今

此年今 此年今 此年今

此年今 此年今 此年今

此年今 此年今 此年今

此年今 此年今 此年今

此年今 此年今 此年今

此年今 此年今 此年今

此年今 此年今 此年今



少遊の著書は海防二年目には五條院に  
 上りて同日進少遊の著書は後少有人中  
 修記を注し抄本の冷少有人列南に  
 今秋列南二年目進少遊の著書は  
 少遊の目錄少有人の列南に著書  
 少遊の著書は少遊の著書は  
 後少有人の著書は今秋少遊の著書は  
 進少遊の著書は少遊の著書は

少遊の著書は海防二年目には五條院に  
 上りて同日進少遊の著書は後少有人中  
 修記を注し抄本の冷少有人列南に  
 今秋列南二年目進少遊の著書は  
 少遊の目錄少有人の列南に著書  
 少遊の著書は少遊の著書は  
 後少有人の著書は今秋少遊の著書は  
 進少遊の著書は少遊の著書は

三

○文化二年三月三日 野崎源部三件左通右源

事 野崎源部左通

此書之紙係家より吾等之より意好むに可なり  
此書係之より意好むに可なり  
之より意好むに可なり

使書 野崎源部左通

右は又云々  
おはすは 此よりおはすは 此よりおはすは  
主様御事奉り候へり  
御目之末に  
野崎源部左通

又新紙より係野崎源部左通  
主様御事奉り候へり  
御目之末に

此書係何所可也の事何と云ふは  
野崎源部左通



文化十三五年 近衛権帥 下向神尾山 市谷のく

角 三番叟	仁右衛門
李光 彦作	源三郎 万道水公
通女 彦吉	七右衛門
羽衣 彦吉	新右衛門
道徳 彦吉	長次郎
礼合 彦吉	権左衛門
万作	左吉

改お舞 仁右衛門  
 浮後 八右衛門

○文化十三五年 四月中旬 疎幸 斎斎 存者 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉  
 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉  
 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉  
 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉

上上吉 澤村田之助 曙山

○文化十三五年 地の以より 疎幸 斎斎 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉  
 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉  
 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉  
 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉 彦吉

御前よりいれり一宮正名も鳥羽屋傷の事と力考す  
すくすく御前よりいれり一宮正名も鳥羽屋傷の事と力考す  
頭より挿すこれに知くの條とやリ  
野も山も移ひり多りせ津乃これ

右 七代目南麗合 尺園仁左衛門 松崎屋我童拜

○久保十二年亥卯月のころより平庭修りおつれりより野村の  
ととて修りすぬれとてはありのれり一に野村のこまを  
りねよりいれりこれよりとてとて

のむねにわたりしんべんの位極もぬちりりり  
大御前乃の事

○より在りて後世より大西止りありは七代目後百多分余程修り帯ととも  
此らより雷もあつて大水入 徳山小形と頼

○吉士日本所大平柿形乃る事あり  
○久保十二年酉子年 大須門前よりあつて是より一宮とすりてこの事  
岩本御前と云者より岩高サニ足斗り至り小も是より一宮とす  
寺ありと云事ありと云事ありと云事ありと云事ありと云事あり  
是れを御り多りて此の事ありと云事ありと云事ありと云事あり  
此れを御り多りて此の事ありと云事ありと云事ありと云事あり  
此れを御り多りて此の事ありと云事ありと云事ありと云事あり

○久保十二年酉子年 大須門前よりあつて是より一宮とすりてこの事  
岩本御前と云者より岩高サニ足斗り至り小も是より一宮とす  
寺ありと云事ありと云事ありと云事ありと云事ありと云事あり  
是れを御り多りて此の事ありと云事ありと云事ありと云事あり  
此れを御り多りて此の事ありと云事ありと云事ありと云事あり  
此れを御り多りて此の事ありと云事ありと云事ありと云事あり



○久保十二年酉子年 大須門前よりあつて是より一宮とすりてこの事  
岩本御前と云者より岩高サニ足斗り至り小も是より一宮とす  
寺ありと云事ありと云事ありと云事ありと云事ありと云事あり  
是れを御り多りて此の事ありと云事ありと云事ありと云事あり  
此れを御り多りて此の事ありと云事ありと云事ありと云事あり  
此れを御り多りて此の事ありと云事ありと云事ありと云事あり  
人のソヤ。醜悪のササ可を子修を存りありりいありありありあり

ヨライ化物目サニガ  
又リ

ヨライ化物目サニガ  
ヨライノササヨササ  
ヨライノササヨササ  
ヨライノササヨササ

○常又... 於此... 觀世... 夜他... 其... 於此... 於此...  
望本年... 延引... 且... 願... 願...

小倉百... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
名録

大夫 觀世大夫 觀世織部 梅若六郎 日吉貞之丞

日吉市郎 西村三郎兵衛 外山九郎右衛門 清又五郎

斎藤安三郎 尾藤權右門 山傳左衛門 福王茂十郎 服部熊之助  
進藤大治郎 春日孫市 高安彦太郎

笛 清甚兵衛 貞光正吉 春日榮之助 寺井勘兵衛

小鼓 大倉喜三入 池田文助 貞光小一郎 一僧又六郎  
觀世新九郎 觀世鏡之助 大倉長右衛門 觀世權九郎

大鼓 藤井權兵衛 大倉利右衛門 幸清五郎 中村山三郎  
大倉長十郎 幸政三郎 長命忠藏

太鼓 高安三太郎 梅若孫七郎 室生隼三郎 威徳三郎四郎  
威徳彦九郎 福三清兵衛 清水助五郎 清水和二郎  
尾羽以辰右

觀世左吉 觀世兵治郎 川村彦兵衛 諸井源兵衛  
觀世三三郎 石井權治郎 長命忠藏 金春惣右衛門

狂言 諸井金三郎 鷺傳四郎 鷺權之丞 岡本方二郎  
鷺仁右衛門 矢田治郎介 長命勘三郎 岡田清右衛門  
田村茂十郎 助五郎 圓藏

以上地誼等畧記

番組

初日

高砂 觀世夫  
進藤權右衛門

高安三太郎  
觀世新九郎

觀世共治郎  
清甚兵衛

田村 觀世織部  
山田傳左衛門

梅若孫七郎  
觀世鏡之助

貞光庄吉

羽衣 太夫  
福王茂十郎

室生鍊三郎  
大倉長右衛門

觀世左吉  
春日采之助

船辨慶 太夫  
高安彦太郎

城徳三郎四郎  
觀世權九郎

高安長三郎  
寺井勘兵衛

祝言 梅若六郎  
金礼 尾崎半七郎

威徳彦九郎  
藤井權兵衛

諸井源兵衛  
大倉喜三八

末廣  
千鳥  
福之神

鷺 仁右衛門  
鷺 傳四郎  
仁右衛門

二日目

加茂 織部  
彦太郎

福王清兵衛  
長左衛門

觀世与三郎  
勘兵衛

八島 日吉貞之丞  
半七郎

三郎四郎  
大倉利右衛門

庄吉

雲林院 太夫  
權右衛門

清水助五郎  
幸清五郎

兵治郎  
甚兵衛

芦荻 日吉市十郎  
進藤大治郎

鍊三郎  
權九郎

喜三八

鞍馬天狗 太夫  
茂十郎

三太郎  
新九郎

兵二郎  
庄吉

八幡之前

金 因  
鬼之継子  
八島間那須

鷺

傳四郎  
仁右衛門  
權之丞  
權之丞  
權之丞

三日月

白樂天 西村三郎兵衛 權右門

實盛 大夫 彦太郎

櫻川 織部 大治郎

夜討巖 大夫

春日龍神 方山九郎右門 茂子郎

惠昆須昆沙門

樂河芥

太刀奈

四日目

西王母 清又五郎 茂子郎

項羽 齋藤与三郎 春日孫市

松風 大夫 彦太郎

熊坂 大夫 權右門

是界 織部 彦太郎

餅之酒

餅差十五

子盗人

助五郎 清五郎 石井權三郎 左十右

鍊三郎 新九郎 兵治郎 榮之助

孫七郎 權九郎 喜三八

三郎四郎 長右門 勘兵衛

中邑山三郎 彦九郎 源兵衛 甚兵衛

權之魚 仁右門

岡本才治郎

彦九郎 利右門 長五郎 甚兵衛

助五郎 山三郎 池田文助 与三郎

三郎四郎 清五郎 勘兵衛

清兵衛 長右衛門 兵治郎 榮之助

鑱三郎 權九郎 權三郎 左吉

岡村茂十郎

仁右衛門

權之魚



五日月

三輪 六部 大治郎

鉢木 三郎兵衛 傳左衛門

蟬丸 大夫 茂十郎

阿漕 大夫 半七郎

土蜘蛛 織部 彦太郎

入間川

腰祈 花折新夜意

六日目

三郎四郎 鏡之助 兵二郎 喜三八

助五郎 權九郎 庄吉

鍊三郎 新九郎 榮 松之助

孫七郎 長者衛門 左吉 甚兵衛

清兵衛 權兵衛 源兵衛 島兵衛

仁右衛門

貞治郎

大社 三郎兵衛 半七郎

小督 織部 孫市

江口 大夫 彦太郎

葵上 織部 茂十郎

海士 赤頭 彦太郎

船渡鞆

三人斥輪

首引

助五郎 權兵衛 源兵衛 甚兵衛

清兵衛 清五郎 勘兵衛

孫七郎 長者衛門 榮之助

三郎四郎 權九郎 權治郎 左三八

鍊三郎 新九郎 兵治郎 左吉

仁右衛門

傳四郎

權之助

七日目

張良 九郎右衛門 彦太郎

七騎落 市十郎 半七郎

山姥 大夫 權左衛門

善知鳥 大夫 傳左衛門

彦九郎 川井彦兵衛 文助

三郎四郎 權九郎 勘兵衛

鍊三郎 新九郎 金春惣右衛門 榮之助

清兵衛 鏡之助 兵二郎 勘兵衛

矢田治郎助

仁右衛門

權之丞

八日目

耶鄂 貞之丞 孫市

忠信 三平郎 大治郎

半節 大夫 大治郎

望月 織部 彦太郎

絃上 大夫 茂十郎

孫七郎 源兵衛 清五郎 喜三八

清水和二郎 大倉長十郎 貞光小一郎

三郎四郎 權九郎 甚兵衛

三太郎 長左衛門 兵治郎 在士古

鍊三郎 寺政二郎 長二郎 勘兵衛

權之丞

仁右衛門

傳四郎

黒塗 武悪 称宜山取

九日目

蟻通 元山慶助  
侍右衛門

安宅 大夫  
彦太郎

龍田 大夫  
茂十郎

俊寛 市十郎  
半七郎

舍利 織部  
孫市

鞍馬茶

井井

十日目

輪藏 与三郎  
大治郎

橋辨慶 市十郎  
孫市

草紙洗 織部  
權右衛門

道成寺 大夫  
彦太郎

鶴飼 早吉勘助  
侍左衛門

業平餅

赤袍落

骨皮

孫七郎  
權兵衛  
權三郎  
文助

鍊三郎  
權九郎  
勘兵衛

清兵衛  
清五郎  
左吉

三郎  
長右衛門  
喜三郎

彦九郎  
錢之助  
兵三郎  
勘兵衛

勘三郎

權之助

清兵衛  
利右衛門  
与三郎  
甚兵衛

助五郎  
山三郎  
喜三郎

三郎  
長右衛門  
勘兵衛

三太郎  
權九郎  
兵三郎  
一層又六郎

鍊三郎  
錢之助  
長五郎  
左吉

權之丞

左衛門

侍四郎

十一日

嵐山 貞之丞 孫市

大佛供養 織部 彦太郎

當摩 大夫 權右衛門

鐵輪 奈 彦太郎

車傳 慶助 半七郎

萩六名

梯山伏 不詳

十二日

合甫 服部熊之助 侍左衛門

盛久 三郎老翁 彦太郎

礎 大夫 權右衛門

天叡 織部 彦太郎

野寺 市郎 孫市

鍊三郎 長右衛門 長三郎 勘兵衛

孫七郎 權九郎 喜三八

幸 三太郎 左吉

三郎四郎 新九郎 兵三郎 榮之助

長今忠藏 助五郎 權二郎 喜三八

助五郎 權之丞

清兵衛 山三郎 孫兵衛 左吉

孫七郎 清五郎 甚兵衛

三太郎 清治郎 勘右衛門 榮之助

三郎四郎 長右衛門 勘兵衛

鍊三郎 權九郎 兵三郎 喜三八

鞞 棟 鎌腹 清左

田七右衛門 仁右衛門

十三日目

竹生鷗 六郎 大治郎

東岸居士 又五郎 半七郎

戀重荷 大夫 權右衛門

通小町 織部 彦太郎

烏帽新 大夫 傳左衛門

孫七郎 兵治郎 鏡之助 勘兵衛

清五衛 權右衛門 左吉

三太郎 前太郎 左吉

鍊三郎 長右衛門 彦三郎

三郎四郎 權九郎 權次郎 甚兵衛

矢田清左衛門

權之丞

十四日目

玉井 勘四郎 彦太郎

禪師我 三郎 茂十郎

富太郎 織部 彦太郎

石橋 大夫 權右衛門

融 織部 彦太郎

三郎四郎 兵治郎 清五郎 甚兵衛

知治郎 長十郎 諸井金治郎 小一郎

助五郎 長右衛門 勘兵衛

三太郎 權右衛門 又六郎 惣右衛門

鍊三郎 新九郎 權次郎 左吉

勘治郎

權之丞

仁右衛門

十五日

鶴龜 大夫 權左衛門

練三郎 權左衛門 兵治郎 甚兵衛

春榮 六郎 傳左衛門

清兵衛 錠之助 文助

吉野天 大夫 茂十郎

三郎四郎 清五郎 長三郎 庄吉

安達原 織部 半七郎

孫七郎 源兵衛 長富門 喜三八

亂 大夫 彦太郎

三太郎 新九郎 左吉口 勘兵衛

麻生

權之丞

宗論

傳四郎

○大化十三年年... けり

○法村田... けり

○山... けり

○同... けり

出... けり

評... けり



接取りし信矢少納りし江府名所之儀なり



右村柳の序をみるや名貴なる所ありて之より多と流り  
太白陰經云々一唐様氏ありて結して弓と一木と列して云々  
又弓之用ハ六六杖ヲ用エル所謂輪也角也筋也膠也絲漆也云々  
又周禮云注曰弓長六尺六寸是之上制ト六尺八寸是之中制ト六尺八寸  
下制ト云々

我朝ニテ日本紀ニ天照太神乎ニ弓弭ヲ振立テトアリ是弓ノ始ナラニカ  
又弓ノ節ト皆名目アリト人ト其ノ繁キカニニ除之

○文化十四丁七年竹腰山城守殿  
初る江府一季後より初る  
ありて流りたる江府之流竹の松子深きし中子被成ハ局ありて  
大流りありて  
○江府五月廿四日萬松寺寂照大和尚遷化ニ付今度ハ江府ニ隱居

○江戸一惣矢數千首幸本

通矢四千七百幸本  
寛文五年五月二日

松平左近將門  
海田伊右門正業

江戸一惣矢數九百幸本

通矢五千三百一本  
寛文四年辰五月廿一日

酒井修理大夫内  
鈴木萬右門重定

江戸一惣矢一万本

通矢五千三百一本  
元禄二年乙丑五月十日

伊達遠江守内  
福井浅右門貞勝

江戸一惣矢一万首幸本

通矢五千三百一本  
元禄十巳四月六日

酒井雅樂頭内  
町田小助



江戸一惣矢九千百辛九本

通矢五千三百五本

至七ツ時前射越其後

文化十四丑四月十五日

當日役掛

尾長殿印房役

杉立信吉正俊

一矢宛行

一矢前頭取弓矢吟味

一射前世話  
毎奉行道

杉立權右三門  
大田甚太主人

山本半左門

細井主税

前田正十郎

山本清五郎  
土佐家  
瀬戸少藤太

加藤錦吉  
波多野喜左門

丹後守

鈴木綱輔  
直野五郎左門

稻熊金右門  
矢部作兵衛

三浦平七

藤井内匠

長尾勝三助

加藤鉄方三郎

水野内藏

野七郎  
角田兵十郎

一分附文

一矢吟味

一射手支度惣

町醫師

一 樽目付 七人

一 味方有十支

一 矢旦一 目付

一 矢旦一 五人

成徳 柴山又七郎  
土佐 播野 博吉  
原田左源太  
小嶋吉右門  
一人分明あり

十倉右衛門  
神保清左衛門  
山本宗右衛門  
加多清三郎  
佐満軍三郎  
新澤 等  
柳生 柳三郎  
白石初彦  
益子八十吉

成徳 平尾 兵馬  
二宮 三右衛門  
加多清左衛門  
大田長作  
江古右衛門  
長嶋 岩吉

水主 海部 大左衛門  
吉田 儀十郎  
細井 八郎  
大田 兵右衛門  
吉田 兵右衛門  
本村 兵右衛門

一客應對

以上

(細井主税)  
時田正十郎  
山本清五郎

地子堂ちの家の一軒借切りし杉三又子如後縁を  
以り平傳ちの波多節と云はる初合六人引越居川十五  
暮八幡の障六つ時分筒焼也其所橋下下其生の  
此より西九尺の穴と堀堂の草書ありと云ふわらうを  
之をまわしつらとまを屋の上へひき行二三十把の世焼  
りゆ竹斗あり出るありと云ふ白屋のわらうを大佛  
筒の入り用廿兩斗のり右筒あり球ちもありして  
俣下考と云ふ二十人立派ありと云ふ龍は水三換才堂の  
迫色水より引考言時分筒斗仕也と云ふわらうを  
想ふ言子も七十四年中通矢動子八百七十京年  
引合橋中親子集集人ありと云ふ丹後ちのりねるを

大石名以藤布る所と入代くはわ新のり言時分日の也と  
し申わく休はまの夕七時と云ふ射候おれと云ふ七時二  
時町田中物のり言と云ふ古ありと云ふ橋と云ふ矢槍  
初大橋上下と云ふ言中と云ふり此は矢と云ふ射候と云  
ひり中と云ふ射候の面と云ふ目礼と云ふ槍一曰槍  
海の傍て射候と云ふ射候と云ふ合派の屋と云ふ射候  
十五本射候と云ふ射候と云ふ一曰槍と云ふ射候と云  
中央其生ののり言と云ふ大言と云ふ揚射候と云ふ一曰槍  
を射候と云ふ矢槍と云ふ引まの百射候と云ふ九本槍と云  
ふしと云ふ

時田正十郎  
山本清五郎  
時田正十郎  
山本清五郎



恒幸八郎

後白河

伊予

飯中

三河

節代

中

伊予

口

三河

酒

伊予

口

三河

三郎

中

伊予

口

三河

三郎

中

伊予

口

三河

三郎

中

伊予

口

三河

三郎

中

伊予

口

三河

河邊三平人

○同年五月廿四日萬松寺山宮區大和尚遷化

今度は江戸信房

より形此の瑞牛水高萬八濃列國龍臺寺住職ありり今年七月

ありり瑞牛水高萬八濃列國龍臺寺住職ありり今年七月

ありり瑞牛水高萬八濃列國龍臺寺住職ありり今年七月

ありり瑞牛水高萬八濃列國龍臺寺住職ありり今年七月

ありり瑞牛水高萬八濃列國龍臺寺住職ありり今年七月

ありり瑞牛水高萬八濃列國龍臺寺住職ありり今年七月

ありり瑞牛水高萬八濃列國龍臺寺住職ありり今年七月

ありり瑞牛水高萬八濃列國龍臺寺住職ありり今年七月

ありり瑞牛水高萬八濃列國龍臺寺住職ありり今年七月

ありり瑞牛水高萬八濃列國龍臺寺住職ありり今年七月

ありり瑞牛水高萬八濃列國龍臺寺住職ありり今年七月

ありり瑞牛水高萬八濃列國龍臺寺住職ありり今年七月

ありり瑞牛水高萬八濃列國龍臺寺住職ありり今年七月

ありり瑞牛水高萬八濃列國龍臺寺住職ありり今年七月

當機絶侍

空

足觀祖業於今日

榮中遷視蒙本寺蓋機之相感矣

應請與望曾住此山而今瑞國牛兄

曩昔惟慧定老

寔理斯令然焉

似貽孫謀於往時

新卒萬松瑞園寺兄大和尚禪師

妙用應緣

凡厥綿々 高板宗族之萃  
隸萬鞞 獨奮傷爽之才

金錫風生入蝦夷雲青鞋靴徒步武野月撲碎諸方瑠璃盆拋擲自家革皮囊  
異貝戲壽大千混沌於塵途孰若主張正法足踏於祖域

摧卵綸追紗喜  
窮富益壯老當益堅  
遇入也迷  
輔教篇慕仲聖

如說而行如法而住  
天道好還 人心有竅  
舍師其誰

返想輔車相依之誼庶見策樵相知之情伏冀  
嵩祝 後天聖圖以副先師重寄

幻住湖東清涼思予寂室堅光  
寺九祥謹疏

入定感八月十九日也右

より交治より系氏の恩傍と得く海立地なり是より丁次ニ載りたり

○京都御園御所進給り為年々御園新地の花見の籠子よりくの紙巻を  
おてり多し其うち藤原よりかゝりてふりて之を藤原のてりてり  
つる世の年水引川の底のてりてりあらゆりてりてり今昔久く化すてり

之を年々系氏の  
三條線 新屋井  
必し一や菊氏  
宮原や藤原

太報  
藤原の  
井原の  
今何やありき

源氏方旅系なり  
物取 系氏行系  
吉原在 系氏行系  
牛丸登家 吉原御代  
世為下系 水口系  
系氏行系 系氏行系

白月社者 系氏行系  
白月社者 系氏行系  
白月社者 系氏行系

白月社者 系氏行系  
白月社者 系氏行系  
白月社者 系氏行系

白月社者 系氏行系  
白月社者 系氏行系  
白月社者 系氏行系

けりて路を中

○當年秋

當今踐作

上使 五浦大右衛門使 子 依直

上使 松平讀岐守殿

副使 戶田備後守殿

西丸

御使 宮原彈正大弼殿

副使 土岐大膳大夫殿

初日

紀伊大納言殿

尾張中納言殿

水戸宰相殿

德川太真殿

紀伊中將殿

一橋大納言殿

德川右衛門督殿

同兵部卿殿

右之分

上使 同日

二日

紀伊中將殿 藤中

松平加賀守殿

溜 松平越前守殿

井伊掃部頭殿

松平肥後守殿

松平越中守殿

溜 松平下總守殿

奥平大膳大夫殿

土井大炊頭殿

青山下野守殿

加納大隅守  
或 瀨豐前守  
太田丹後守  
加納大隅守  
同人

京都町奉行  
佐野肥後守  
同人  
同人

松平圖書  
今枝民部  
佐治生計  
本口三郎右衛門  
松平倉之助  
佐竹又兵衛  
有馬右馬之介  
奥平求馬  
伊藤六郎兵衛  
奥平春宮  
白鎖求太夫  
佐久間龍助

酒井若狹守殿  
阿部備中守殿  
松平能登守殿  
水野出羽守殿  
松平右京太殿

右初日從是以下少將

松平左京大夫殿  
松平中勢太輔殿  
松平豐後守殿  
松平陸奥守殿  
松平因幡守殿  
松平安藝守殿  
松平上總介殿  
伊達遠江守殿  
從是以下侍從

松平播磨守殿  
松平大學頭殿  
細川越中守殿  
松平出羽守殿  
松平肥前守殿  
松平備前守殿  
藤堂和泉守殿  
南部大膳太殿  
松平大膳太殿  
有馬玄蕃頭殿  
上杉彈正大弼殿  
京對馬守殿  
松平土佐守殿  
立花左近將監殿  
松平越後守殿

鷲見四郎左衛門  
近藤助左衛門  
岩松藤市  
丸山顯輔  
堀越平左衛門

加藤武右衛門  
大越民部  
澤田園右衛門  
森十左衛門  
中山備中  
津田大和  
淺野縫殿  
池田出雲  
神尾近江

櫻井惣右衛門  
柳橋内記  
平野九右衛門  
三谷權右衛門  
村田彈正  
加藤内匠  
藤堂玄蕃  
黒川玄蕃  
毛利黒主  
村上四郎左衛門  
鴻津左京  
松坂大和  
初間伊束  
立花全水  
古市隼人



松平阿波守殿  
松平彈正大弼殿  
佐竹德壽九殿  
牧野備前守殿  
小笠原大膳大夫殿

從是已下四品

松平淡治守殿  
津輕越中守殿  
松平備後守殿  
織田出雲守殿  
松平大和守殿  
脇坂中務大輔殿  
酒井左衛門尉殿  
神原遠江守殿  
井伊右京大夫殿

蜂須賀賢之丞  
河野平助  
佐竹山城  
上田左五右衛門

野村兵部  
津輕監物  
吉地弥右衛門  
生駒造酒介  
渥美源吾  
脇坂千右衛門  
中村三郎兵衛  
上田弥平治  
真砂逸平

真田彈正大弼殿  
松平隱岐守殿  
酒井雅樂頭殿  
久世大和守殿

右以上三日目從是以下諸大夫

松平和泉守殿  
松平甲斐守殿  
堀田相模守殿  
戶田泉女正殿  
內藤備後守殿  
戶澤大和守殿  
松平丹後守殿  
石川全殿頭殿  
本多下總守殿  
小笠原全殿頭殿

小山田又六郎  
奧平長兵衛  
松平孫三郎  
吉田嘉十郎

杉崎角左衛門  
川口十大夫  
副 向藤左衛門  
副 戶田治部左門  
副 馬場大學  
副 加藤一藤太  
本多賴母  
喜多尾源太兵衛

相馬長門守殿  
岡部義濃守殿  
松平伊賀守殿  
本多中勢大輔殿  
秋田山城守殿  
松平英之助殿  
丹羽左京大夫殿  
松平左近將監殿  
中川修理大夫殿  
松浦肥前守殿  
加藤遠江守殿  
仙石義濃守殿  
京極長門守殿  
伊藤彦松殿  
稻葉伊予守殿

溝口伯耆守殿  
毛利甲斐守殿  
黒田甲斐守殿  
稻葉對馬守殿  
阿部鐵丸殿  
土屋相摸守殿  
牧野越中守殿  
戸田日向守殿  
松平伯耆守殿  
松平右近將監殿  
松平周訪守殿  
井上河内守殿  
秋元左衛門佐殿  
水野和泉守殿  
内藤紀伊守殿

熊川兵庫  
高久隼人  
松井空之進  
遠藤八郎太夫  
細川内藏助  
松平新祐  
丹羽門十郎  
河村本多兵衛  
田村相馬  
大岩五兵衛  
加藤傳左衛門  
磯野源太左衛門  
坂源太夫  
佐脇三治郎  
長倉伴九郎  
石田兵左衛門

寺田吉十郎  
瀧川一學  
田代四郎左衛門  
八太三左衛門  
小澤平太夫  
岡本莊兵衛  
津久井小四郎  
大塚伴事  
金固基介  
日高裕藏  
奥村幸右衛門  
南輪右衛門  
牧野十郎右衛門  
太田仁右衛門  
須賀井半兵衛  
内藤喜又

有馬左兵衛佐殿  
太田攝津守殿  
板倉克之進殿  
安藤對馬守殿  
間部鉞之進殿  
松平駿河守殿  
鍋島加賀守殿  
鍋島甲斐守殿  
藤堂佐渡守殿

右四日目五萬石以上ヲ載多最御役儀之人者拾別ナリ

○同年就  
女御蘇家之御女御入内  
上使諸大名御使等左ニ著之  
上使 井伊掃部頭殿  
副使 大澤右京太夫殿

有馬右仲  
甲賀杵介  
西郷與右衛門  
立川彦左衛門  
奥村治右衛門

右初  
紀伊大納言殿  
尾張中納言殿  
大戶守御殿  
徳川右兵衛殿  
紀伊中將殿  
紀伊左衛門殿  
一橋左衛門殿  
徳川右兵衛殿  
徳川兵部卿殿  
杉平右衛門殿  
杉平越前守殿  
杉平水滸守殿  
杉平越中守殿  
杉平下総守殿  
奥平左衛門殿

浪石儀多  
山打之計  
雜賀孫守殿  
浪石儀多  
口人  
口人  
口人  
口人  
少息也  
西原也  
寺心也  
不任也  
古名也  
結部也

古丹去秋既度  
吉山り望き居  
酒井若使居  
河部由中居  
杉本能中居  
各望白相居  
信是以下少將  
杉本九条居  
杉本中務居  
杉本豊後居  
杉本度用居  
杉本同帳居  
杉本如飛居  
杉本上總介居  
杉本積使居

信是以下少將  
但直是下居  
杉本攝居  
杉本太政居  
細川細居  
杉本白相居  
杉本肥前居  
杉本由方居  
藤堂相居  
南郡大居  
杉本大居  
有馬吉居  
上杉居  
宗對馬居  
杉本七居

白鶴城交  
信之居  
智之居  
田中居  
大山居  
吉是居  
信水居  
吉居  
少村居  
白志居  
之堅居  
池田居  
之居

武田居  
海居  
吉居  
之居  
之居  
浦居  
居  
居  
居  
吉居  
居  
居  
居

立包を有る者  
杉年然好る者  
杉年何ははる者  
佐竹徳府有る者  
牧野徳府有る者  
小島東大権者

右の如く上り下りあり

立包同進  
田中五代  
山崎貞常  
田代九郎  
小島初吉  
為徳有る者

○文化丁七年十月有南河内郡有少くも東中より画工  
首飾りあり而して其の技を述べて其の画を以て其の画也  
相宗ありて其の思に予有る如く  
目一人 鼻一人  
耳三人 口一人  
面一人 手一人  
業一人 依五人  
口行徳常を本 口後徳常を本



○今年萬福寺より入元寺より牛車ありて  
國君の上座ありて  
今茲文化丁己吾道福場龜岳山万松禪寺虚席於是年請前龍泰瑞固手禪  
師補本寺為瀧開堂演法

右盛以  
師補本寺為瀧開堂演法

倡道行規 須是蘊義哲匠  
擢才護教 必焉禮答賢明  
方外今々僧道師海内孰為護教之任  
曇華易觀 知識難逢  
伏唯 應世才優  
新命珍半和尚

慕古志粹  
遇縁即宗  
達士豈守一隅  
明珠不避濁水  
隨知為主

勿道高風匹<sup>ニ</sup>延<sup>ル</sup>居<sup>ラ</sup>  
欲<sup>ス</sup>為<sup>ル</sup>末流<sup>ニ</sup>作<sup>ル</sup>老<sup>シ</sup>龜<sup>ト</sup>

時哉

瑞龜連<sup>ニ</sup>蓮菜<sup>ト</sup>

祥雲擁<sup>ニ</sup>紫樞<sup>ト</sup>

鯨鳴<sup>リ</sup>龜吼<sup>ル</sup>。巋然<sup>ニ</sup>紺園<sup>ト</sup>改<sup>メ</sup>觀<sup>ル</sup>  
虎如<sup>シ</sup>踞<sup>ル</sup>龍<sup>ノ</sup>如<sup>シ</sup>幡<sup>ノ</sup>鬱<sup>ニ</sup>子<sup>ト</sup>金城<sup>ト</sup>逾<sup>リ</sup>固<sup>シ</sup>

力提<sup>ニ</sup>綱要<sup>ト</sup>

丕<sup>ニ</sup>壽<sup>ト</sup>

國家<sup>ト</sup>

齊朝御判

所<sup>レ</sup>牛<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>如<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>有<sup>ル</sup>酒<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>少<sup>ク</sup>大<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>位<sup>ニ</sup>祿<sup>ヲ</sup>去<sup>レ</sup>り<sup>テ</sup>中<sup>ノ</sup>庫<sup>ノ</sup>程<sup>ノ</sup>ホ  
上<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>比<sup>リ</sup>り<sup>テ</sup>青<sup>ノ</sup>流<sup>ノ</sup>下<sup>リ</sup> 仰<sup>ル</sup>海<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>大<sup>ノ</sup>徳<sup>ヲ</sup>示<sup>ス</sup>洋<sup>ノ</sup>州<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>あ<sup>リ</sup>し<sup>テ</sup>志<sup>ス</sup>  
嚙<sup>ル</sup>保<sup>ル</sup>ま<sup>ル</sup>る<sup>ニ</sup>も<sup>テ</sup>あ<sup>リ</sup>り<sup>テ</sup>左<sup>ノ</sup>京<sup>ノ</sup>又<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>年<sup>ノ</sup>ふ<sup>リ</sup>公<sup>ノ</sup>為<sup>リ</sup>り<sup>テ</sup>温<sup>ノ</sup>産<sup>ト</sup>

所<sup>レ</sup>駕<sup>ノ</sup>り<sup>り</sup>並<sup>ニ</sup>末<sup>ノ</sup>あ<sup>リ</sup>り<sup>テ</sup>年<sup>ノ</sup>を<sup>テ</sup>重<sup>ク</sup>な<sup>ル</sup>る<sup>ト</sup>

○ 希<sup>ニ</sup>小<sup>ノ</sup>形<sup>ノ</sup>を<sup>テ</sup>移<sup>シ</sup>立<sup>テ</sup>信<sup>ヲ</sup>な<sup>ク</sup> 浮<sup>リ</sup>ハ<sup>レ</sup>暢<sup>ク</sup>妙<sup>ク</sup> 此<sup>ノ</sup>の<sup>ヲ</sup>亦<sup>ニ</sup>口<sup>ノ</sup>牙<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>如<sup>シ</sup>居<sup>ラ</sup>れ<sup>タ</sup>ル<sup>ト</sup>  
祐<sup>ニ</sup>近<sup>ニ</sup>是<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>名<sup>ヲ</sup>知<sup>ル</sup>る<sup>ト</sup>傳<sup>フ</sup>言<sup>ハ</sup>し<sup>テ</sup>る<sup>ト</sup>や

文化十四年丁丑四月六日  
自<sup>レ</sup>昔<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>刻<sup>キ</sup>夜<sup>ニ</sup>申<sup>ス</sup>再<sup>ニ</sup>次<sup>ニ</sup>丁<sup>丑</sup>年<sup>ノ</sup>六<sup>日</sup>丁<sup>丑</sup>年<sup>ノ</sup>刻<sup>キ</sup>射<sup>テ</sup>起<sup>リ</sup>射<sup>上</sup>  
射<sup>テ</sup>起<sup>リ</sup>矢<sup>ノ</sup>限<sup>十五</sup>本<sup>田</sup>矢<sup>ノ</sup>檢<sup>見</sup>共<sup>ニ</sup>依<sup>テ</sup>申<sup>ス</sup>日<sup>止</sup>

江戸  
通矢三百六拾本

總<sup>矢</sup>九<sup>十</sup>百<sup>五</sup>十九<sup>本</sup>  
同<sup>日</sup>射<sup>テ</sup>續<sup>テ</sup>百<sup>射</sup>終<sup>申</sup>申<sup>刻</sup>前<sup>前</sup>  
通<sup>矢</sup>五<sup>十</sup>八<sup>本</sup>

尾張殿御弓役

父<sup>ノ</sup>杉<sup>立</sup>權<sup>右</sup>衛<sup>門</sup>正<sup>色</sup>指<sup>節</sup>

矢<sup>ノ</sup>檢<sup>見</sup>

谷<sup>治</sup>共<sup>衛</sup>衛<sup>門</sup>貴<sup>人</sup>正<sup>色</sup>  
中<sup>島</sup>安<sup>房</sup>衛<sup>門</sup>信<sup>貞</sup>易<sup>切</sup>  
増<sup>田</sup>海<sup>兵</sup>衛<sup>門</sup>

矢<sup>ノ</sup>檢<sup>見</sup>

釘<sup>貫</sup>利<sup>方</sup>衛<sup>門</sup>師<sup>範</sup>銳<sup>三</sup>  
三<sup>宅</sup>次<sup>郎</sup>正<sup>貞</sup>貞<sup>貞</sup>  
竹<sup>内</sup>左<sup>衛</sup>門<sup>廣</sup>重<sup>重</sup>

杉立信吉藤原正俊

文化十四年丁丑三月廿八日

本堂射初

白羽一手

射<sup>テ</sup>續<sup>テ</sup>半<sup>堂</sup>根<sup>矢</sup>百<sup>射</sup>  
通<sup>矢</sup>九<sup>十</sup>六<sup>本</sup>

杉<sup>立</sup>權<sup>右</sup>衛<sup>門</sup>正<sup>色</sup>門<sup>弟</sup>男<sup>弟</sup>  
杉<sup>立</sup>信<sup>吉</sup>正<sup>俊</sup>指<sup>節</sup>

尾張殿内侍了頭  
山<sup>本</sup>半<sup>右</sup>衛<sup>門</sup>長<sup>方</sup>四<sup>男</sup>

山本末吉源長敏

生<sup>年</sup>十<sup>三</sup>歲









- 大科の軍目長有るは法として法をかるべし
- 氏をむちやりち社生所の令を以て法をかるべし
- 先祖の事おれぬ志の形影をとりてあるべし
- 君又してそむきまじき事 根柢をみるべし
- 執らねばまねり 有らば天運を御る
- 人の事おれぬはまじし 己の常計に御る
- 高下をわたり御るは法の法を以て御る
- 佛に亦不吉なり 他人とて國を自身に令を借ぬべし
- 人の事おれぬはまじき事 徳を信じて
- 他人の事を思ふは法を以て御る
- 徳人をまじし 徳人を敬好せしめしむべし
- 非道な事もあまき事 己の法を以て御る
- 世の地典を妄とせしめしむべし
- 逆を打ねたるは法を以て御る
- 人の信を以て御るは法を以て御る

- 楊根を好む大金を以て御るは法を以て御る
- お家おのちおれぬは法を以て御る
- 宗を以て御るは法を以て御る
- 信を以て御るは法を以て御る
- 徳人をまじし 徳人を敬好せしめしむべし
- 非道な事もあまき事 己の法を以て御る
- 世の地典を妄とせしめしむべし
- 逆を打ねたるは法を以て御る
- 人の信を以て御るは法を以て御る

然るに...







天保十一年	立春正月	月	大寒	十二月	小寒	十二月	小寒
	月	月	月	月	月	月	月
	初	初	初	初	初	初	初
	上	上	上	上	上	上	上
	右	右	右	右	右	右	右
	火	火	火	火	火	火	火
	合	合	合	合	合	合	合
	土	土	土	土	土	土	土
	木	木	木	木	木	木	木
	辛	辛	辛	辛	辛	辛	辛
	丑	丑	丑	丑	丑	丑	丑
	房	房	房	房	房	房	房
	宿	宿	宿	宿	宿	宿	宿
	軒	軒	軒	軒	軒	軒	軒
	水	水	水	水	水	水	水
	上	上	上	上	上	上	上
	よう	よう	よう	よう	よう	よう	よう